



橋口五葉《黄薔薇》1912年 個人蔵

Topics

生誕130年 橋口五葉展

浅川巧生誕120年記念 浅川^{のりたか}伯教・巧^{たくみ}兄弟の心と眼—朝鮮時代の美—
ドローイングの楽しみ

棟方・富本・リーチ—近代日本の版画を中心に

線の美しさ、心地よさ

日本東洋の絵画は、墨を筆であやつる描線の動きに、実に多くを負っています。自然の形や人の心の、強さや優しさ、激しさやなごやかさなどを、一本の線が画家の表現の意図を微妙に伝えてくれるのです。絵の中のごく一部に目をこらし、描線の質を読み取ろうとするだけで、絵を見る楽しみがいちだんと増すことでしょう。生誕130年を記念する特別企画展「橋口五葉展」は、そうした日本画の描線の楽しさ、美しさを、存分に味あわせてくれるはずです。

橋口五葉といえば、若くして亡くなる直前に刊行した木版画の連作によって、一般に知られています。手鏡を見ながら白粉を肌^{おしろい}に刷く《化粧の女》、豊かな黒髪をくしけずりながら物思う《髪梳ける女》などの名作を思い出す方が多いことでしょう。日本女性の清楚な美しさを木版によって表したそれらの版画では、顔や身体の輪郭には細くしなやかな線、髪の毛の一本一本をうねるように引く極細の線、そして一転して、肥瘦の変化も急で勢いのある着物の衣文線^{えもん}などと、彫り師の腕を信頼して変化に富む線の美を多様に演出してくれています。

そうした五葉の新版画は、東京美術学校(現在の東京藝術大学)で学んだ西洋画法を基礎に、さらに春信や歌麿の浮世絵版画の良さを徹底的に研究したことから生まれたものでした。浮世絵美人画の伝統を近代的な感覚でよみがえらせた成果だったのです。五葉の徹底した浮世絵研究に、私も若い頃多くのことを教えられました。今で

も、浮世絵の歴史を学ぼうとする若い人に、五葉の残した100年ほど前の論文をよく読むように勧めているほどです。

浮世絵美人を近代によみがえらせるといっても、ことはそう簡単にはいきません。その苦闘の跡を五葉は、総数何千枚ともいわれる鉛筆書きの素描で示してくれています。女性のモデルをあらゆる角度から写すそれらの鉛筆デッサンは、清らかな線によって高められ、気高くさえ見えるほど美しいものです。今回の展覧ではそうした素描をはじめ、五葉の日常の苦労を偲ばせる生の資料がたくさん紹介されるはずで、私自身もそれらの報告を楽しみにしているところです。

同時に併催される所蔵品展では、「ドローイングの楽しみ」と題して、線の美しさや面白さを様々な館有品から引き出してお見せします。企画展とあわせて、日本絵画のもつ線描の魅力を満喫していただけることでしょう。

続いて8月からは、浅川^{たくみ}巧の生誕120年を記念して、「浅川^{のりたか}伯教・巧兄弟の心と眼—朝鮮時代の美—」展を開催します。浅川兄弟は、李氏朝鮮時代、いわゆる李朝陶磁の魅力を再発見し、その研究と啓蒙とに努めた先覚者でした。朝鮮陶磁に影響された日本近代の陶工たちも数多く、彼ら兄弟の功績をしのび顕彰する良い機会となることでしょう。

〔館長 小林 忠〕

生誕130年

橋口五葉展

橋口五葉といえば、美女を艶麗かつ典雅に描いた木版画を思い浮かべるかたが多いことでしょう。昨年春に開催した所蔵名品展「近代日本美術の百花」でも数点を展示しましたが、代表作《化粧の女》を使ったチラシともどもご好評をいただいたところです。今回の「生誕130年 橋口五葉展」は、木版画の仕事にとどまらぬ、橋口五葉の全画業をたどる大回顧展。展覧会の準備中に出現した多くの新出資料を含む400点あまりから、その創造の軌跡をたどります。

橋口五葉は1881(明治14)年、鹿児島市樋之口^{てのくち}町に生まれました。士族橋口家の三男坊で、本名は清です。父は書画に興味深く四条派の筆法にたけ、長兄・次兄ともに絵をたしなんで一家で芸術論議に花を咲かせたといえますから、絵描きになるには実に恵まれた環境に育ったといえましょう。生家の広い庭には樹齢300年になるろうかという五葉松が聳えていました。雅号はこれにちなみます。

13歳の頃から地元の絵師に狩野派の画法を学び、鹿児島中学校を卒業した1899(明治32)年、18歳の夏に上京します。はじめ橋本雅邦に入門しますが、親戚にあたる黒田清輝から洋画を勧められたといわれています。白馬会洋画研究所を経て1900(明治33)年に東京美術学校予備課程へ、そして翌年同校西洋画科本科へと進みました。美校時

代の活動についてはよくわかっていませんが、白馬会の出品作に共通する、紫を多用した淡白な油彩風景のいくつかが残って



装幀『吾輩八猫デアル』(夏目漱石著) 1905年 弥生美術館蔵

います。けれども五葉は次第により物語的・装飾的な絵画へと向かい、ラファエル前派の構図や雰囲気からの影響、日本やインドの古代神話への憧憬を見せるようになります。そうした転向には当時の尖端的な画家たち—1902(明治35)年に《天平時代》を描いた同郷人の藤島武二、あるいは1903(明治36)年から一連の神話画を発表し始める美校の一年先輩、青木繁からの感化があったと考えられています。

1905(明治38)年に東京美術学校を主席で卒業しますが、この年にある転機が訪れます。夏目漱石の『吾輩ハ猫デアル』で初めての装幀を手がけるのです。漱石とのゆかりは、五葉の長兄貢が熊本の第五高等学校時代に漱石の教え子だったことに由来します。五葉は兄を介して漱石に親しみ、そのなかだちで『ホトトギス』に挿画を寄せるようになりますが、洒脱で新鮮な造形が漱石をいたく喜ばせ、初の著作の装幀をまかされたというわけです。自らも水彩画を描き、装幀にも一家言のあった漱石は「うつくしい本」を望み、表紙を「玉子色のとりの子紙の厚きものに朱と金」で工夫してほしい、などと具体的な注文をつけたことが五葉宛の書簡からわかります。五葉は漱石の要望にきっちりと答え、さらにジャケットや扉、奥付に独自の図案を展開して本を総合的な視覚芸術へと昇華させました。近代装本の嚆矢として高く評価されることになる『吾輩ハ猫デアル』を、今回は数々の画稿とともに展覧し、記念すべき装幀の構想から完成までをご覧ください。

図案の才能は競技図案で受賞を重ねた美校時代からすでに発揮されていますが、いわば五葉の天性であり、それが『吾輩ハ猫デアル』という場を得て一気に開花したものでした。五葉を発掘した漱石の眼力にも感心させられますが、以後五葉は漱石のほか泉鏡花や森鷗外と組み、美しい装本の数々を世に送ってゆきます。特徴的なのは草花や昆虫、魚や鳥などを流れるような曲線で縁取って連続させ、あるいは組み合わせた紋様でしょう。アール・ヌーヴォーの影響を指摘するのは簡単ですが、外来の造形を借りるだけでなく、自身の筆致となるまで咀嚼し、消化しているのが五葉の偉大なところ。装幀から雑誌の表紙や絵葉書、ポスターやパンフ



《此美人》1911年 個人蔵

レットへと仕事は広がり、五葉はまさにデザイナーの先駆けとして、明治期の末から大正期にかけてのグラフィック界に忘れがたい一群を残しました。

グラフィック・デザインの分野でいまひとつ特筆すべきはポスター《此美人》でしょう。1911(明治44)年に三越呉服店が主催した懸賞広告に応募したもので、

五葉は見事一等を獲得、破格の賞金一千円を手に入れました。当時流行の髪型「二百三高地」を結った意志の強そうな美女は石版35度摺という豪華なポスターに姿を変え、三越の秋の大売り出しを宣伝するとともに、五葉の名を全国に広めました。女性の顔や手をリアルに描きながら着物や帯、椅子や壁には図案化した草花をちりばめる構成には、五葉が洋画修業で培った写実表現と、生来得意とする装飾的・平面的な描法とのせめぎあいを見ることができます。



《化粧の女》1918年 千葉市美術館蔵

装飾美術家としては売れっ子になっても、洋画家としては必ずしも評価されなかった五葉は、次第に油絵から遠ざかってゆきます。代わりに1914(大正3)年頃からのめり込んだのが浮世絵でした。まずは研究者として鈴木春信論や喜多川歌麿論を発表、ついで1915年の秋に版元渡邊庄三郎と出会い、自らの下絵を彫師と摺師に託して木版画となす新しい仕事に乗り出します。翌年はじめに完成した《浴場の女》は協同した人々の初心を映し出しているように、現在「新版画」と呼ばれる分野の嚆矢と位置づけられています。下絵師としては不満が残ったと見え、五葉は渡邊のもとを離れて再び浮世絵研究に没頭します。そして1918(大正7)年以降、自ら彫師と摺師を抱え、監督する私家版での制作に入り、《化粧の女》や《髪梳ける女》に代表される珠玉の一群を残したのです。

さて、今回の展覧会は橋口五葉の生誕130年を記念したものです。が、実は2011年は、五葉が没して90年が過ぎた年でもあります。130から90を引くと40。生まれつき病弱だった五葉は、1920(大正9)年の暮れにかかった流感から中耳炎を発し、脳膜炎を併発して翌年わずか満40歳で生涯を終えた人でした。独自の表現を求めて日本画や洋画、デザインの領域を涉獵した果てにたどり着いた私家版木版も、実質的な制作期間は3年足らず。完成した作品は11点に過ぎませんでした。そうした画業の未成ゆえか、あるいはひとつのジャンルに収まらないマルチな才能ゆえか、五葉は優れた仕事を残していながらあまり研究の進んでいない作家といえます。

ところが、本展準備中に出現した珍しい資料を監修者の岩切信一郎氏と鹿児島市立美術館学芸員の山西健夫氏とともに検討するなかで、以前の解釈にいくつかの修正を加え、あるいは年譜の空白に何らかの活動を想定することが可能となりました。たとえば今回、大分の耶馬溪や大阪の天下茶屋、文楽座、道頓堀などにつ

いて綴った自筆紀行文が発見されました。耶馬溪をメインとするこの旅は、これまで1910(明治43)年と考えられてきましたが、紀行文の日付から翌年であることがほぼ確定となりました。たかが1年の違いではありますが、1年ずらすことにより、1911(明治44)年の春に《此美人》で得た賞金を、6月から始まる旅の軍資金としたという推測が成り立つのです。当時の一千円は現在の一千万円ともいわれる大金です。それが二ヶ月におよぶ大旅行へと五葉を誘ったと考えるのは自然ですし、紀行文を記す小説家のようなやや気取った筆致は、栄誉に浴してまもない五葉の、ある種の気負いを感じさせるのも事実です。

作品としては最も大きな発見となった《黄薔薇》も、五葉像の見直しを迫るものでした。本作は「^{むせいかい}无声会」という新しい日本画を標榜するグループの第12回展(1912年5月)に出品されて以来所在がわからず、白黒写真でのみその存在が知られており、ほぼ100年ぶりの公開となる作品です。実は五葉は、美校を主席で卒業した俊英でありながら、1907(明治40)年の東京府主催勸業博覧会と文展でこそ高評を受けますが、その後油彩での評価には恵まれません。けれども装幀を軸とする数々のデザインの仕事をを経て挑んだ《此美人》では第一等に輝きます。受賞に自信を得た五葉は、《此美人》の図案的・装飾的な造形を今度は日本画で試みた、それが《黄薔薇》ではなかったかと思うのです。鼻筋や顔の輪郭から見て同じモデルを使っていることも傍証となるでしょうし、表装にまで刺繍による草花をちりばめた絢爛豪華な一幅からは、日本画での再起を期する五葉の意気込みがありありと伝わってきます。

けれども残念ながら、当時の展評から判断して、《黄薔薇》は高評を得られなかったようです。无声会には翌年の第13回展にも《ペリカン》を出品、図案的・装飾的傾向をさらに強めた作で挑みますが、論調は変わりませんでした。五葉はこのあたりで本画を断念し、傾倒を深めつつあった浮世絵へと、本格的に旋回してゆくと考えられます。

新出資料から浮かびあがる事柄はほかにもあります。五葉は1916(大正5)年の4月から亡くなる直前まで家計簿をつけていました。毎月の支出が神経質そうな小さい文字で記された、五葉のハイカラでかなり贅沢な暮らしぶりを伝えるものですが、これによれば五葉は同年7月以降没する間際まで、「モデル」にしばしば賃金を払っています。公募展への出品をやめ装幀などデザインの仕事も減ってゆく当時、「モデル」たちの姿が残されたとすれば、年代不詳とされてきた裸婦素描の一群しかありません。画家としてよりも浮世絵研究者としての姿を鮮明にしていた時期、五葉は研究のかたわら、鉛筆でひたすらに裸婦を描いていました。モデルに繰り返し同じポーズをとらせ、修正と純化を重ねながら、やがて墨線となるべき一本の線を探す―。そしてその先にあったのが、1918(大正7)年に始まる私家版木版だったのです。

洋画の修得が一段落した明治期の末から大正期のはじめにかけて、日本人は何を、いかに描くべきかという問いに絵描きの誰もが直面していました。五葉の場合その答えは、写生による自然な

描写を浮世絵の手法と調和させることでした。ただし答えに至る道は平坦ではなかったし、見いだした時にはあまり時間が残されていないという悲劇も待っていたのです。

数々の新出資料とともに代表作を網羅する本展は、橋口五葉の創作と思考の細部をかつてなく照らすことでしょう。日本と西洋の融合という同時代の作家にとって等しく切実な、果てしのない夢を追ったひとりの画人の軌跡を、ありありと伝えることができたらと願っています。

[学芸員 西山純子]



《抱る女二態》1914-1920年頃 千葉市美術館蔵

関連企画

■ 記念講演会

・「新・橋口五葉 ^{ものがたり} 譚」

7月10日(日)14:00より(13:30開場) 11階講堂にて

講師: 岩切信一郎(美術史家)

定員: 150名 聴講無料

■ 市民美術講座

・「橋口五葉が追い求めた女性像」

6月25日(土)14:00より(13:30開場) 11階講堂にて

講師: 西山純子(当館学芸員)

・「橋口五葉と浮世絵」

7月16日(土)14:00より(13:30開場) 11階講堂にて

講師: 小林 忠(当館館長)

*いずれも定員: 150名 聴講無料

■ ギャラリートーク

担当学芸員による

6月15日(水)14:00より

ボランティアスタッフによる

会期中毎週水曜日(6月15日を除く)14:00より

*水曜日以外の平日の14:00にも開催することがあります。

生誕130年 橋口五葉展

2011年6月14日(火)▷7月31日(日)

10:00—18:00(毎週金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

〔休館日〕 7月4日(月)

〔観覧料〕 一般 1,000(800)円、大学生 700(560)円

*小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

*〔 〕内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの60歳以上の方の料金

*前売券はローソンチケット(Lコード:37960)、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」

「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(7月31日まで)にて販売

浅川兄弟のいる風景 ―展覧会に寄せて―

千葉市美術館では、「浅川^{たくみ}巧^{のりたか}生誕120年記念 浅川伯教・巧兄弟の心と眼―朝鮮時代の美―」を開催します。

朝鮮半島のやきものは古来よりわが国に多くの影響を与えてきました。なかでも、桃山時代における茶道や近代の民藝運動などのかかわりは大きく、一般的にも知られています。

山梨県に生まれた浅川伯教(1884-1964)と巧(1891-1931)の兄弟は、植民地時代(1910-45)の初期、朝鮮半島に渡りました。彼らは朝鮮家屋に居をかまえ、地元の人々に溶けこみながら暮らします。やがて伯教は朝鮮陶磁の研究では第一人者となり、また弟の巧も、やきものや木工品について名著を遺しました。

もともと、伯教は地元の山梨で小学校の教師(訓導)として生活する一方で雑誌『白樺』などを愛読し、1912(明治45・大正元)年には新海竹太郎(1868-1927)に師事して彫刻を学んでいました。二十代前半、日本国内で日々を送っていた彼の姿は、多趣味だった祖父の性格を受け継ぎつつ、自分の居場所を探しているかのようです。そんな折に彼は朝鮮のやきものと出会い、そのふるさとに渡ることを決意します。13年、朝鮮へ渡った彼は、五年ばかりは小学校の教師を勤めていましたが、その後は在野の陶磁研究者(実作者でもあった)として過ごし、46年に日本に引き揚げるまでの間に、朝鮮半島全域の700あまりの窯跡を調査するなど、今日でも参照し得る貴重な業績を挙げています。彼が「朝鮮陶磁の神様」と呼ばれるゆえんです。

一方、巧は兄の強い影響を受け、1914(大正3)年に兄を追って朝鮮に渡り、植林の仕事に従事します。彼の人生は短いものでしたが、その信条は柳宗悦(1889-1961)と安部能成(1883-1966)が終生なつかしく回顧しているところからも明らかのように、若き日のキリスト教体験と、その後に出会った白樺派の人道主義や大正時代の教養主義に裏打ちされています。彼の生涯は70年代後半以降、徐々に知られるようになりましたが、政治的なイデオロギーを持って理解すると誤解が生じる恐れがあります。私は、彼の人生をたどる際には、まず同時代の宮澤賢治(1896-1933)が著した「グスコブドリの伝記」(1932)を読むことが最もふさわしいように思います。他者に篤かった巧は、自らを犠牲にしてイーハトーブを守った火山局の技師・グスコブドリそのものです。

このような浅川兄弟が取り組んだ朝鮮のやきものの研究で特筆されるべき点は、世界に先駆けて「李朝」―朝鮮時代(1392-1910)のやきものに注目し、その美と向かい合ったことです。

李朝のやきものは、李朝以前の高麗時代(913-1392)に作られていた青磁、あるいは中国のやきものなどと比較すると、稚拙とも思われる細部の仕上げや上絵、十分に精製されていない釉薬や土によって生み出された不透明な肌合いから、全体的に田舎くさい印象を与えます。言い換えれば、技巧を凝らした末に作り上げられたやきものではなく、大地と人間の交わりのなかでぽっかりと生み出されたような存在です。それまで、欧米や日本の研究者や鑑賞家から「劣っ



《青花辰砂蓮花文壺》朝鮮時代・18世紀後半
大阪東洋陶磁美術館(安宅英一氏寄贈)

浅川巧生誕百二十年記念
浅川伯教・巧
兄弟の心と眼
―朝鮮時代の美―

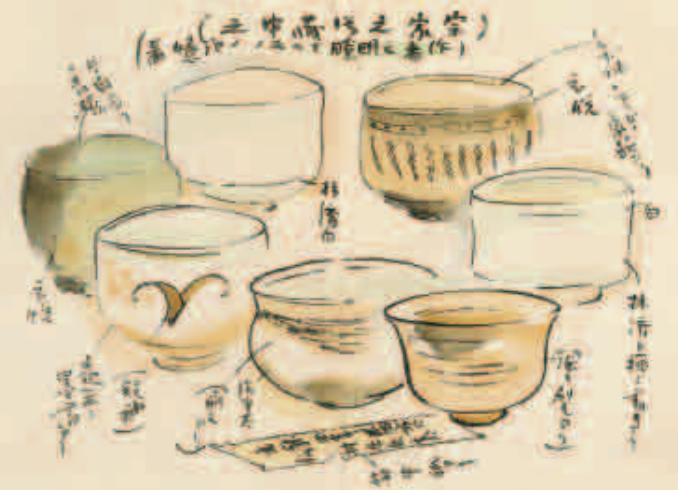
た」とされていた点を浅川兄弟は積極的に見つめ、やきものの鑑賞と研究に新しい可能性を加えたのでした。

1920年代以降、浅川兄弟の活動によって李朝のやきものや工芸品は一躍注目を浴びることになります。彼らは時代を代表する陶芸家、研究者そして数寄者たちのよき協力者、導き手として朝鮮時代の美術を紹介しました。例えば、彼らが柳を触発し、そこに陶芸家である河井寛次郎(1890-1966)、濱田庄司(1894-1978)、富本憲吉(1886-1963)たちが加わったことによって、民藝運動のあゆみは具体化しています。

しかしながら、浅川兄弟と柳を中心とする民藝運動との結びつきのみを強調すると一事実、そうなりがちですが―今回の展覧会全体を見誤ることになります。冒頭に記したとおり、日本人と朝鮮半島のやきものとの関わりは、はるか昔までさかのぼることができます。特に、浅川兄弟の活動を考える上で重要な先例として、茶道におけるやきもの(茶陶)の存在があります。

鎌倉時代、中国より喫茶の嗜好がもたらされ、そのなかから室町に入り中国産の天目や龍泉窯系の青磁唐物によって美的価値判断の体系が作り上げられました。しかしこの時代の中期、15世紀に入ると村田珠光がいわゆる「珠光青磁」や国内で作られたやきもの(国焼)を茶に適うものとして見出し、桃山期には朝鮮半島から渡来した高麗茶盃(「高麗」と呼ばれてはいますが、これは李朝に作られた茶碗です)を経、千利休そして長次郎による楽茶盃が創られました。ここに、「わび」を宗とする茶道が成立する過程で、中国～朝鮮～日本と茶碗の評価が変わり、いわば「和様化」とも呼べる展開を見ることができます。この鍵となっているものが珠光青磁と高麗茶盃ですが、前者は中国の南方で生産された淡い黄褐色の釉薬を基調としたもので、それまで珍重されていた青磁と比較すると明らかに完成度は低く、はるかに「ざっかけ」なものですし、後者はよりその傾向が徹底されています。珠光が見出した国焼もこれらと同様です。精緻の極みとも呼ぶべき茶盃から「拙なる」ものへの転換。これは浅川兄弟が李朝のやきものを見出したことと同じ精神の軌跡を描いています。浅川たちははるか昔の先人たちを、知らず知らずのうちに追っていた、と云えるでしょう。

それでは、浅川兄弟が見出した美がなぜ受け入れられたのでしょうか。やはりこれはまず、雑誌『白樺』創刊以来の美術鑑賞の流れ、柳たちの文章の影響が大きかったと考えることができます。この文脈において、李朝のやきものは現実の世界と対峙し、自らの内面生



浅川伯教『釜山窯と對州窯』(彩畫會／工政會出版部 1930)より
浅川伯教「宗家の御藏中の作者明瞭なるものゝ記憶図」

活を護り、そして高めるための「もの」としての役割を担っています。この意味において柳や浅川兄弟たちによる「朝鮮民族美術館」の開館(1923)は、『白樺』同人の中心人物である武者小路実篤(1885-1976)が主導した「新しき村」と同じ性格を帯びています。

ところが、大正期に開催された李朝の美術を紹介する展覧会はあくまで(柳たちによって)鑑賞を主体として開催されているものが大半なのですが、昭和に入ると売買を目的とした展覧会が多く開催されています。これは何を意味するか。大正期に学生として柳たちの思想に感化された経験を持つ青年層が、昭和に入ると社会人となり、自分が働いて得た収入で李朝のやきものなどを購入するようになったということを裏付けています。浅川兄弟が発見し、柳が「思想」として喧伝した李朝の美は、「商品」として流通することによって、よりしっかりと根付いたのです。

このような一般の愛好家たちによる李朝のやきものの受容とは逆に、能動的に摂取した事例もあります。

それが、陶芸家たちによるものです。

江戸時代の後期から明治にかけて、やきものだけではなく美術全般で写真とそれを支える技巧が発達しました。開国し、欧米との貿易がはじまると、技巧を凝らした工芸品は日本からの輸出品として重要な部分を占めるようになります。この風潮は抜きがたい技巧偏重を招き、その反省から、浅川兄弟が見出した何の飾り気もない「素のまま」である李朝のやきものが、学すべきひとつの規範として陶芸家たちに受け入れられるようになっていきました。特に、これは代々の家業を受け継いだ陶芸家ではなく、新たにやきものに向かっていった人々に顕著な例として見られます。さきに挙げた河井、濱田、富本はその一例です。

そして、もうひとつ別の傾向の作家たちもいます。

桃山時代、日本では志野や織部、唐津、備前、伊賀など各地で多様なやきものが作られています。これらの多くは茶と密接な関連がありますが、このような国焼だけではなく、すでに記したように朝鮮のやきものが茶の世界で高く評価されています。昭和になり、桃山時代のやきものの再現を目指した陶芸家たちが現れますが、彼らの中には、北大路魯山人(1883-1959)や川喜多半泥子(1878-1963)のように、自ら朝鮮半島に渡り古窯址の調査(魯山人)や、現地の窯で実作を試みる者(半泥子)もいました。そして、彼らの動向とも伯教は関わりを持っています。

私見ですが、「昭和陶芸の桃山復興」と今日呼ばれる魯山人たちの動向について、これまでは志野や黄瀬戸の再現など、国焼の復興のみに限定して考えられていましたが、今後は朝鮮(をはじめとするアジア)のやきものについても視野に入れる必要があるでしょう。なぜなら、魯山人による朝鮮半島南部の古窯址調査は1928(昭和3)年のことであり、国内を調査する以前のことです。この事例のみを念頭に置いたとしても、大正時代から行われていた浅川兄弟による李朝のやきものの鑑賞と研究・調査は「桃山復興」の前史として考えなければいけない面があります。兄弟の活動を「民藝」の範疇に止めて理解すると彼らの活動が矮小化されるとする理由はこのためです。

浅川兄弟たちによって評価の先鞭が付けられた李朝のやきものを受容する陶芸家たちの流れは、1945年以降に生み出された「オブジェ焼」と呼ばれる新しい陶芸を生み出す土壌となっています。ちょうど、珠光青磁や高麗茶盃を受け入れた精神が、それまでのやきものとは一線を画す「樂茶盃」を生み出したように。この精神史については、今後さらなる調査と分析が必要ですが、今回の展覧会がその端緒となることを願います。

残念なことに巧は若くして世を去り、朝鮮から日本に引き揚げてきた伯教も1949(昭和24)年から千葉市内に居を構えますが、時代の変転のなかで調査や研究の成果を十分にまとめることなく歿しました。本展は、朝鮮陶磁の傑作として名高い《青花辰砂蓮花文壺》や《青花窓絵草花文壺》(共に大阪市立東洋陶磁美術館蔵)など、浅川兄弟と柳宗悦が選び抜いた旧朝鮮民族美術館のコレクションをはじめ、伯教作の絵画資料や陶芸作品、柳自筆の原稿、そして同時代の陶芸家たちの作品など約200点を通して、今日改めて評価の気運が高まる浅川兄弟の事跡を、はじめて体系的に紹介するところみです。

〔学芸係長 藁科英也〕

関連企画

■ 記念講演会

・「浅川兄弟と『李朝』のやきもの」

8月27日(土)14:00より(13:30開場) 11階講堂にて

講師: 片山まび(東京藝術大学美術学部芸術学科准教授) 定員: 150名 聴講無料

・「近代日本の朝鮮陶磁―浅川伯教・青山二郎・安宅英一を中心に―」

9月3日(土)14:00より(13:30開場) 11階講堂にて

講師: 森 孝一(日本陶磁協会事務局長) 定員: 150名 聴講無料

*その他の関連企画については、チラシまたはホームページをご覧ください。

浅川巧生誕120年記念 浅川伯教・巧兄弟の心と眼―朝鮮時代の美―

2011年8月9日(火)▷10月2日(日)

10:00―18:00(毎週金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

〔休館日〕 9月5日(月)

〔観覧料〕 一般 1,000(800)円、大学生 700(560)円

*小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

*〔 〕内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの60歳以上の方の料金

*前売券は、ローソンチケット(Lコード:39839)、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(10月2日まで)にて販売

所蔵作品展 ドローイングの楽しみ

2011年6月14日(火)▷7月31日(日) 【休館日】 7月4日(月)

*同時開催「橋口五葉展」ご観覧の方は無料



現在開催中の企画展「橋口五葉展」では、艶やかな女性を美しい線でとらえた画家の素描も見所の一つとなっています。本画あるいは完成作に対して、素描や下絵の味わいには、また別の楽しみがあります。作家の思考過程を覗くことへの興味だけでなく、たとえば鉛筆やペンのみで引かれた線が、画面を伸びやかに、ときに迷いためらいながら走る様子は、色面で構成された絵画とはまた別の想像力をかき立てることもあるでしょう。所蔵作品による本展覧会では、線の美しさやおもしろさを魅力とする作品をコレクションの中から選んで紹介します。

対象の特徴をすばやくとらえ、かたちの本質を簡潔に表す力は、古今東西を問わず絵描きの基礎的な技量として求められてきたものといえます。木版技術の発達により、多色摺りの浮世絵など出版文化が花開いた江戸時代中期には、作画の基本を押さえる

所蔵作品展 棟方・富本・リーチ—近代日本の版画を中心に

2011年8月9日(火)▷10月2日(日) 【休館日】 9月5日(月)

*同時開催「浅川伯教・巧兄弟の心と眼」展ご観覧の方は無料

「^{のりたか たくみ}浅川伯教・巧兄弟の心と眼—朝鮮時代の美—」展の開催に合わせ、本館が所蔵する版画作品のなかから同展に関わりのある作家の作品を中心に紹介します。展覧会にも掲げられている棟方志功(1903-75)、富本憲吉(1886-1963)、バーナード・リーチ(1887-1979)は主として昭和戦前期まで「民藝」との関わりの中で語られることが多い作家です。いずれも魅力的な作家とその作品ばかりですが、ここでは、リーチについて記します。

ロンドン美術学校でエッチングを学んでいたリーチは、留学中だった高村光太郎(1883-1956)との出会いによって、幼年時代を過ごしたことのある日本で再び暮らす決意を固め、1909(明治42)年に来日します。彼は生活の資を得るために、自らが学んだエッチングを教えることを計画します。光太郎との出会い、そしてこのエッチング教室の開設が、志賀直哉(1883-1971)をはじめとする雑誌『白樺』の同人たちと知り合うきっかけとなっています。

ところで、銅版画家だったリーチはなぜ陶芸家へと転身することができたのでしょうか。

このことは、従来さまざまに語られています。陶芸に対するリーチの関心は、1911(明治44)年富本憲吉と共に参加した青年美術家の集まりの余興として楽焼の絵付けをしたことが始まりとされていますが、これだけではそれまで彼が学んでいた技術を放棄してまで熱中する理由にはなりません。

銅版画と陶芸には、技術的な共通する性格があります。それは、

ための絵手本として略画や画譜が出版されました。今回は、版本のコレクションの中から、略画の名手歟形蕙斎(北尾政美)の『略画式』(寛政7(1795)年)に始まる、人物、鳥獣などの分野ごとにまとめられたシリーズの他、画譜類に見られるいきいきとした巧みな線を、加えて時代は飛んで後世の風刺画のユーモアに満ちた線をご覧ください。

展示の後半では趣向を変えて、さまざまに線を引く、その作業自体が作品となり、私たちの前に心地よいリズムとともに表れます。また「ドローイング」は、しばしば描き手の心の動きや未整理の感情が現われた小品として、私たちを魅了します。そこには作者の手から放たれ生まれゆく線があり、イメージの生成過程を、かたちになってゆく様を、間近に感じることができます。展示の最後のコーナーでは、主に水彩作品の中から、これらの「親密な線」を取り上げてみたいと思います。

[学芸員 山根佳奈]

北尾政美『略画式』(部分) 寛政7(1795)年 千葉市美術館蔵



どちらも制作の過程で一旦作者の手を離れ、腐食液や炎という化学変化に作品が委ねられるという点です。また当時、陶芸はすでに純然たる化学として整理されていましたが、彼は最初に六世尾形乾山から経験則に基づく昔ながらの作陶を学んでいます(後に、その欠点を自ら補っています)。技術的な共通点が無ければ、あるいは後に友人となった河井寛次郎(1890-1966)や濱田庄司(1894-1978)たちのように、最初に「化学としての」陶芸と出会っていたら、その後の陶芸家リーチはなかったように思われます。

皆様からよくリーチ転身の理由について尋ねられるので、私の考えを簡単に記してみました。

[学芸係長 藁科英也]



バーナード・リーチ《北京天壇》
大正5(1916)年 千葉市美術館蔵

【開館時間】 10:00—18:00 (毎週金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

【観覧料】 一般 200(160)円, 大学生 150(120)円

*小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

* ()内は団体30名以上、および市内にお住まいの60歳以上の方の料金

◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

今年度上期は右記の内容で行います。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

[時間] 14:00より(開場は30分前)

[場所] 11階講堂

[定員] 先着150名(入場無料)

- | | | |
|------|----------|-------------------------------------|
| ○第2回 | 6月25日(土) | 「橋口五葉が追い求めた女性像」
[講師] 西山純子(当館学芸員) |
| ○第3回 | 7月16日(土) | 「橋口五葉と浮世絵」
[講師] 小林 忠(当館館長) |
| ○第4回 | 8月20日(土) | 「昭和陶芸の古典復興」
[講師] 藁科英也(当館学芸係長) |
| ○第5回 | 9月17日(土) | 「棟方志功と民藝運動」
[講師] 西山純子(当館学芸員) |

◎ボランティア日和

ワークショップは楽しい。

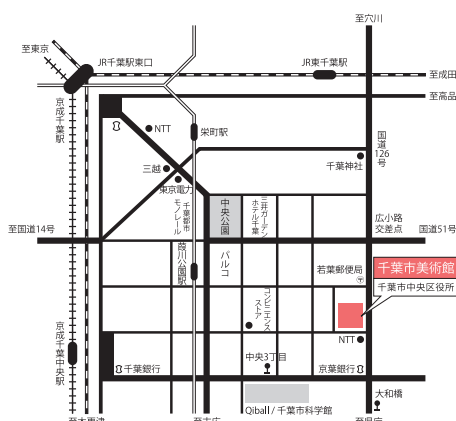
プラ板でストラップをつくるワークショップも、今回の浮世絵展(「ボストン美術館浮世絵名品展」)で4回目。最初は「八犬伝の世界」(2008年度)のイケメン八犬士。2回目は所蔵作品展「近代日本美術の百花」(2010年度)での花にまつわるもの。3回目は「MASKS 一仮の面」(同)でのお守り。参加してくださる方と一緒に作るワークショップは、直接お客さまとかかわれることが、なんと言っても楽しい。私たちボランティアスタッフが試作したものとまったく異なる色合いで仕上げられた作品は、いつまでも記憶の奥に残っている。私たちの想像を超えた『これもアリなのね!』と思わせる作品に出会うと、参加者の創造力の豊かさに脱帽してしまう。そして、出来上がった世界にたった一つだけのストラップを、嬉しそうに大事に見ている参加者を、いとおしいとさえ思ってしまう。

参加者とのふれあいは、もちろん楽しい。でも、私たちは、ワークショップに向けて準備している時間を、それ以上にもっと楽しんでいるのかもしれない。『また、プラ板でワークショップしようか?』と何かのはずみで話が持ち上がったら、あの面倒な準備のことなどすっかり忘れて、気持ちはワークショップ本番に向かっている。難

題なのがタイトル決めと下絵選び。展覧会に因み、かつ、目を引くタイトルを考えるのは、いつも一苦労。そして、下絵に色を付けて、オープントースターで焼くまでの試作品作りの道のり。ワークショップ本番に向けての、一緒にやる仲間との、試行錯誤のわいわい・がやがやを、いつも楽しんでいる。

美しい作品、感動した作品に出会った時、人は、自分も何か表現したいという思いにとらわれないだろうか。少しでも参加者の自己表現の機会になれるのではないか、というおこがましい思いが、私をワークショップに駆りたてる。

[美術館ボランティア 本間恭子]



[交通案内]

- ◎JR千葉駅東口より
- 徒歩約15分
- バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩3分
- 千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- ◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- ◎東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
- ◎地下に駐車場があります



千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

<http://www.ccma-net.jp>

[編集・発行]

千葉市美術館
〒260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
[発行日] 2011年6月13日
[印刷] 半七写真印刷工業株式会社

